最先端の研究と個々に適合した教育つねに進化を続けてきた大学が新学群の開設でさらに世界を変革する

1997年、公設民営の私立大学として開学した高知工科大学。当時は公立大学法人という制度がなく、自由度や機動性を重視し、私立大学という形を選択しました。その後、あるべき姿を求め、2009年に公立大学法人に移行。現在はシステム工学群、理工学群、情報学群、経済・マネジメント学群の、理系・文系にわたる4学群(1) を擁する大学として発展を遂げています。

学生一人ひとりに最適化した教育の実現のため、全科目を選択制にするなど、独自の「面倒見の良い教育」により企業からも「採用を増やしたい大学」と高い評価を獲得してきました。こうした中、2024年度からは新たに「データ&イノベーション学群」が始動。新時代のDXを牽引し、ここ（高知）から日本を、そして世界を変革します。

ちょうの しげおみ
蝶野成臣学長

1978年大阪大学工学部産業機械工学科卒業。82年同大学大学院工学研究科産業機械工学専攻博士課程退学。専門は流体工学、ナノマイクロシステム。カリフォルニア大学バークレー客員研究員、福井大学工学部助教授、高知工科大学教授などを経て2023年より現職。

高知工科大学

〒782-8502　高知県香美市土佐山田町宮ノ口185　入試課　TEL 0887-57-2222　https://www.kochi-tech.ac.jp

最先端の研究設備と支援で教員の専門性向上に注力

高知工科大学の基本理念は、「来るべき社会に活躍できる人材の育成」「世界の未来に貢献できる研究成果の創出」「地域社会との連携と貢献」です。蝶野成臣学長は、これら3つの理念の関係について、次のように説明します。

「人材の育成には、研究レベルの高い優れた教員が不可欠です。さらに大学が担う社会貢献もまた専門性に依存することを考えれば、教員の専門性向上（＝研究）が理念を実現する根幹になると考えます」

高知工科大学が研究に注力するのは、こうした理念に則ったもので、最先端の独創的な研究や、これからの世界をリードすることが期待できるテーマに対し、集中的に研究員・資金・環境・機器などの支援を行っています。優れた研究者が自らの責任において、自由に、創造的な研究を展開できる「場」として平成11年度に開設された総合研究所は、「主要研究センター」のほか、将来的に発展する可能性のある萌芽的な研究を実施する「重点研究室」、企業などとのオープンラボ拠点である「産学共創センター」から構成されます。目指すは、国際的な研究の中心拠点です。

一方で、高知工科大学では、学生にとってより魅力的な授業を実現するため、履修した全講義について学生が無記名アンケートを行う授業評価制度を導入しています。各授業の評価結果は学内に公開され、評価点は毎年の教員評価に反映されます。

「講義への評価が可視化されることで課題が見つかり、教育、研究、社会貢献というテーマに対し、現時点で何が足りないのかを教員が自覚し、向上する機会（FD）になっています」と蝶野学長。高知工科大学の理念を支える教員の優れた専門性は、こうして日々、磨かれています。

開学時からのスタンダード日本初のクォータ制

高知工科大学の特徴の一つとして、「面倒見の良さ」が知られています。日経HRと日本経済新聞社による「企業の人事担当者から見た大学イメージ調査」では「採用を増やしたい大学ランキング」で全国2位と高評価を得ましたが、その就職実績は2001年卒業の第一期生以来、一貫して90%台を維持しています(2)。企業から注目される学生が育つ教育とはどのようなものなのでしょうか。

「私たちの教育モットーは、人が育つ大学です。『育てる』ではなく『育つ』、そして『人』の中には学生だけでなく教職員も含まれます」

人が自律的に育つその教育システムには、他大学とは異なる独自性が光ります。例えば、「面倒見の良さ」を象徴する全科目選択制。高知工科大学には必修科目がなく、自分が興味を持った科目を将来の目標に応じて自由に選択し、オリジナルのカリキュラムを作ることができます。必修がないのに、方向性を見失わず体系立てた学修が可能なのは、指導教員が一人ひとりをよく見て、適切な科目選択をアドバイスしているからです。

「少人数教育で学生と教員との距離が近く、丁寧な履修指導があってこそ全科目選択制は成立します。本学が『面倒見が良い』と評価される所以ですね」

また、高知工科大学は日本で初めてクォータ制を導入しました。一般的な海外の大学の制度に合わせて互換性を高めるという理由からだけではなく、1科目を週2回のペースで学び、2カ月で区切りがつく短期集中型の方が、身につきやすいためです。学期ごとの成績に鑑みてこまめに履修登録の変更ができたり、教員がサポートを必要とする学生に早いタイミングで気づけたりとメリットが多く、クォータ制は「人が育つ」大学として当然の選択でした。他にも、学生が夢や志を叶えるために使える時間を確保できるよう、一日の講義のほとんどを3限までに終了させるなど、日本の大学では珍しい取り組みが目を引きます。文武両道で名を馳せている秘訣は、このような有効な時間の使い方にあるのです。

「自由と自主性を重んじ、教員がつかず離れず伴走する教育システムが、企業からの高評価につながっているのだと自負しています」

社会が渇望する「次世代型ビジネスパーソン」が育つ

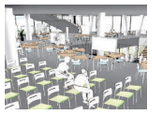
新学舎完成予想図（2026年4月完成予定）

「見る」「知る」「協働する」育成型創造的ワークプレイス環境

高知市の文教地区である永国寺町にふさわしいシンプルで落ち着いた雰囲気にデザインされた新学舎は、データサイエンスを含む先端ICT技術を学び、使いこなし、有用な情報から新たな価値を創造できる文理統合型のDX人材育成・輩出の場として、産学官連携・高大連携の拠点となります。そこでは基本的なデジタルリテラシーを学ぶだけでなく、社会に対する俯瞰的視野も兼ね備えるためにPBL（課題解決型学習）を主軸とした多様性のある学びの場を実現し、企業や様々な機関との出会いを導き、具体的な連携が可能です。自主的・協働的学びを促し、多様な交流を通じてイノベーションが花開く空間となります。

コワーキングスペース（1階）
ものづくりスペースと視覚的・動線的にシームレスにつながる空間です。学生・地域・企業の情報交流、ものづくりの着想から具現化までをスムーズに行えます。

プレゼンテーションコート（1階）
約120名が着席できる階段状のフリースペースに大型ディスプレイを常設し、開放的なプレゼンコートとして、自由で積極的なコミュニケーションを促す場となります。



グループワーキングスペース（2階）
課題内容を解決に導くための「聴く、実践する、まとめる、共有する」を連続的に行える協働スペース。レイアウトの自由度もあり、プレゼンスペースとしても利用できます。

グループコート（2階から3階への階段上）
窓からは高知の城下町が一望でき、歴史的都市を近くに感じながら最先端の研究に取り組むことができる絶景のロケーション。

学生研究スペース（3階・4階）
仕切りのない1フロアスペースに複数の研究室を配置。これにより孤立する研究室をなくし、研究の連動性により学群全体の高パフォーマンスが可能となります。

地域の課題に挑む新学群が始動

デジタルトランスフォーメーション（DX）が世界中で進む中、日本における人材不足が懸念されていますが、有為な人材を育成する役割を担うのが大学です。高知工科大学は来年度、新たに「データ&イノベーション学群」を開設します。この学群では、データサイエンスとマネジメントに加え、多様な分野の基礎的原理を網羅的に習得する文理統合型を学びの柱にしました。

「学群は、AI・データサイエンス専攻とデジタルイノベーション専攻の二つから構成されます。前者はビッグデータから仮説を立て、検証し、既存のものに新たな価値を加える力を養います。どちらかといえば理数系寄りといえるでしょう。後者はIT技術の社会実装までを視野に入れており、文系寄りといえます。この理系・文系を有機的につなげて統合し、『工学的視点』と『社会に対する俯瞰的な視野』の両方を兼ね備えた人材の育成を目指します」

有機的なつながりのポイントとなるのが、1年生から導入されるPBL（課題解決型学習）です。高知県内外の企業や自治体と連携し、実際に存在する社会課題の解決を試みます。実践力だけでなく、人間ならではの発想力や想像力で、広い視野から社会やビジネスにおける未来の形をデザインする力を育みます。

「PBL教育はコーディネートする教員の力量が問われ、非常に時間がかかるものです。だからこそ学生数に比して教員数を多く配置し、力を入れています。世界的企業で活躍する実務家教員も複数配置する予定です。県内でも期待が大きく、企業や高校からの関心も高い。ここで成果が出せたら他学群へPBL教育を拡大することもできるでしょう」

新学群の設立は、高知工科大学の今後の教育システムを量る試金石でもあるのです。

将来迷ったときに立ち返る自分の軸を身につける大学生活

開学27年目を迎える高知工科大学には、現在約2600人の学生が在籍しています。国際交流会館(3)では留学生と日本人学生が交流しながら生活し、今年4月には女性エンジニア育成支援センターも完成しました。多様な人々を迎え入れる姿勢は、入学者選抜からも窺えます。一般選抜のほか、学校推薦、総合型選抜(4)、社会人特別選抜があり、学力一辺倒ではなく人物本位で選ばれる機会を大切にしています。

「卒業後の人生で迷ったときにいつでも立ち返ることができるような、自分の軸となる基礎力を在学中に身につけるよう、充実した大学生活を送っていただきたいと思います。そうした成長に必要な最先端の研究設備と気鋭の教員陣が、皆さんを待っています」と蝶野学長は呼びかけています。

(1) 学群制

理学、工学、情報学、経済学、マネジメント学、データサイエンスに共通するのは、個々の領域が非常に幅広く、かつ互いに影響を及ぼしていること。例えば工学分野で知能機械工学を専攻する場合には、材料工学やプログラミングの知識が不可欠となる。

こうした学問の特性から、高知工科大学では「学部・学科制」ではなく「学群制」を採用している。これは小さな学科単位で区切るよりも、学群の多彩な領域から、目的・興味に合わせて自由に学べるようにとの教育方針によるもの。学群には複数の履修プログラム（専攻）を設定し、柔軟にカリキュラムを選択することができる（メジャー・マイナー制）。

(2) 就職率の高さ

2023年春卒業生の就職内定率は、工学系3学群で96.4%、経済・マネジメント学群で94.1%、修士課程で99.0%。求人企業件数は11,308件を数え、卒業生は全国で活躍している。

高知工科大学では、指導教員や就職担当教員のみならず、「教育講師」という独自の制度により、企業の第一線で働いた経験者たちが学生たちのよろず相談に応じ、大学生活や就職活動をサポートしているのが特徴。

地方からの就職活動にかかる費用の助成や、大都市での企業説明会に参加するバスツアーを開催するなど、支援策は手厚い。

(3) 国際交流会館（International House）

留学生と日本人学生がともに暮らす学生寮は、居住者同士だけでなく、留学生、日本人学生、教職員、地域との交流の場としても利用されている。このほかにも、団体生活の良さとプライベートの確保を兼ね備えた学生寮が複数用意されている。男子学生寮である香美キャンパスのドミトリーは家具・食事つき。香美寮（女子学生寮）もある。

(4) 総合型選抜

学校推薦型選抜は大学が出願の条件を指定し、高等学校長からの推薦によって受験するが、総合型選抜は高知工科大学で学びたいという意欲や、入学後に学びたいこと・研究や将来の夢を、志望理由書や面接の場で受験生が直接アピールする。自分の得意分野を活かすことができる入試であり、学校推薦型選抜とは性質が異なる。